

インドは世界の DOJO

——『海外派遣者ハンドブック インド編』刊行にあたって

日本のインドに対する投資は他の先進諸国に比べると劣っている。
海外派遣者も含め人の交流も少ない。なぜか。どうすればよいか。

前・日外協 業務部長 矢野文之

赴任者のためにヒントを

2022年5月、日外協・国際ビジネスアドバイザーの西川裕治氏に同行し、インドに12日間滞在した。デリーを振り出しに、ムンバイ・ブネー・チェンナイ・ベンガルールの順に5都市を回り、合計22の企業もしくは団体を訪問、43人の方々にお会いした。

今回のインド訪問の目的は、日外協『海外派遣者ハンドブック インド編』刊行のための取材であった。現地の駐在員などにインタビューし、仕事面や生活面での様々な体験を聞いた。「インドあるある」をできるだけ多く集めて、それらを本書の「事例編」としてまとめて読者に紹介する。この「事例編」は当ハンドブックの最大の特長と言ってよい。これからインドに赴任する方は、現地で思いがけないトラブルに巻き込まれる可能性がある。当書で紹介されている23の事例を事前に読んでおけば、ショックを和らげることができるし、どうすればトラブルを避けられるかのヒントが見つかる。ハンドブックには、ある意味「ワクチン」的な効果がある。

日本発の「カイゼン」活動

訪問した日系企業の中で特に印象に残ったのは、多くの現地従業員を抱える製造業の現場であった。現場における日本発の「カイゼン」活動は、世界中の生産現場で取り入れられている。インドもその例外ではない。

「3M(ムリ・ムダ・ムラ)の削減」「5S(整理・整頓・清掃・清潔・^{しつけ}躰)活動」などがその代表的なもの。現場からの提案を吸い上げながら全員の創意でミスをなくし、効率的に作業を行う日本の製造業における優れた仕組みが導入されている。



ベンガルールにあるトヨタ・キルロスカ・モーター内にあるトヨタ工業技術学校の朝礼の様子

ある工場の中に「DOJO」と書かれた大きな部屋があった。これは日本語の「道場」のことで、大部屋で生産技術を互いに磨き合うトレーニングルーム。中をのぞくとインド人の先生が5～6人の若手社員を指導している。壁には様々な図が掲げられており、生産に関する模型や試作品なども展示してある。こうした光景は日本企業の世界中の生産現場で見られる。柔道がJUDOとして世界に認められたように、日本の生産現場におけるDOJOも世界標準になっている。

「ジャパン・パッシング」?

ハンドブックの対象国としてインドを取り上